
夏の贈り物

thlaspi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の贈り物

【Nコード】

N3676E

【作者名】

thlaspi

【あらすじ】

ある朝、俺は小さな幸せを拾った……。ベランダで拾った小さな虫がきっかけで、ある家族のささやかな物語が始まります。派手な展開はないですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

第1話：拾ったもの

目が覚めると、網戸の外に消しゴムほどの大きさのクワガタが転がっていた。そいつはまだ元気に生きていて、腹を見せて必死で空中を掻いていた。

俺はベランダに出て、クワガタをつまみ上げた。住宅街の中にあるこのマンションまで、こいつはどうやって飛んできたのだろうか。そう思っただけ空を見上げると、雲ひとつなくきれいに晴れ上がっていた。今日も暑くなりそうだった。

これから一日中、外を歩き回って、広告の契約を取らなきゃならないことを思うと、このクワガタみたいに羽がついていたらと思わずにはいられなかった。

でも、俺はクワガタを逃がしてやるわけにはいかなかった。もうすぐ三歳になる甥っ子のツムグが、姉貴に連れられて遊びに来ている。こいつをツムグに渡してやったら喜ぶだろうと思ったのだ。

*

ダイニングルームに入ると、ツムグは朝から格別にご機嫌だった。TVから流れるCMソングにあわせて、床の上で腹ばいになってバタバタと暴れていた。隣の和室では、姉貴が臨月の腹を抱えてだらしなく眠っていた。

俺は、食卓の上にあったコップに、クワガタを放り込んだ。

「和彦、これどうしたの？」

母親は、コップの中で暴れているクワガタを覗き込んだ。

「起きたらベランダに落ちてた」

俺は言った。

「ツムちゃん、おいで。和彦がクワガタ採ってくれたよ」

母親がツムグを呼び寄せた。

「えっ、どっっ、どっ」

ツムグは、食卓の下で懸命に背伸びをする。

「先に虫かご取ってこい」

俺が言うと、ツムグは虫かごを大事そうに抱えて戻ってきた。

「よっしゃ、じゃあ、中に入れてやるうか」

俺は言った。

「やだ、先に見して」

ツムグは答えた。

クワガタはまだ諦めずに外へ出ようと全力で暴れていた。俺はコップを持ってツムグの目線まで下ろした。

ツムグはコップの中を見下ろすと、「何だ。ヒラタ」と、つぶやいた。子どもなりに精一杯つぶつぶって、いかにもつまらない奴なんだぜと言わんばかりの喋り方をしてみせる。

「ヒラタ？」

俺が聞き返すと、ツムグは虫かごを床に置き、和室の方へ何かを取りに戻った。

俺の目の前にツムグが広げて見せたのは、“みぢかなこんちゅう”という図鑑だった。ツムグが指した小さめのクワガタの下には、ヒラタクワガタと書かれている。ツムグの喜びようが、ひととき小さかった訳がよく分かった。

続いてツムグは、オオクワガタと書かれてある一番大きい写真を指した。

「ここにいるの」

ツムグは虫かごの前にしゃがんだ。かごの中には砕けたスイカの欠片が転がっていて、その上には、新品の石鹼ほどの大きさと光沢を持った黒い塊が動いていた。

「ツンちゃん、いいねえ。どこかで採ってきたの」

答えを分かち合っていて、母親がツムグに問いかける。こんな立派な虫がその辺に落ちている訳はない。

「ううん、あっちのジイジは、買ってくれた」

子どもは子どもなりに、巧みなテクニクで大人の競争心をあおり、もう一匹ぐらい立派な虫を手に入れてやるうと計算を働かせているらしい。

「ツンちゃんすごいね。いいのもらったねえ」

母親は徹底的にツムグをおだてておねだりをかわす。まずは手練に長けたオババが一勝した。伊達に長くは生きていないみたいだ。

「そうか、じゃあ、こんな小さいのは要らないんだ」

俺も母親の手練を見倣おうと、わざとそっけなく言ってみた。そうしたら、ツムグは、「要るっ」と言って、わりあい素直に虫がごのフタを開けた。

俺はコップをひっくり返して、クワガタをツムグの目の前に差し出した。

「いいか、ツムグ」

俺は二十七歳の俺に込められる限りの万感の想いを込めて言った。

「自分の手で採れるものはいつも小さいんだ」

「しってる、パパがいつもいってる」

まったく関心がなさそうにツムグは答え、あっさり俺に背中を向けると、ヒラタクワガタを加えた虫がごを抱えて、姉貴の方へ走って行ってしまった。

「ママ、ママッ、マアアマッ、和ちゃんがヒラタくれた」

「ヒラタ？」

起き抜けで不機嫌な姉貴の声が答えた。

「このうんと小さいの」

ツムグは朝から『うんと』俺をへこませてくれる。

「よく見て、ぴったりくっついて見ないと分かんないよ」

「ああつ、もう、ツムグ、分かったからママのお腹押さないで」

姉貴は、全力でじゃれついてくるツムグにたまりかねて、ゆっくりとした動作で身支度をして起き上がった。

「ああ、やれやれ。よいしょっと」

姉貴は誰に当たるでもなくイライラと大きな声を出した。大きく

張った腹の下に両腕を添えて重そうに抱えている。

「疲れてるんだから、ゆっくり寝ればいいのに」

母親が言った。

「寝てても暑いし、ツムグは寝かしてくれないし」

姉貴は言つて力なく笑うと、食卓についた。

俺は焼きあがったトーストに薄くマーガリンを塗って、その上にたっぷりとピーナツバターを塗った。熱すぎるコーヒーを多めのミルクで埋めて一口すする。その間中ずっと、姉貴は食卓に頼づえをついて、飽きもせず俺の顔を眺めていた。

「何見てんだよ」

俺は言った。

「一回訊いてみたかったんだけど、あんた、本当においしいと思つて食べてる？」

姉貴は珍しい食べ物の味でも訊くみたいに、俺の反応を興味深そうに観察していた。

「そんなことまでいちいち考えて食ってないよ」

俺は言つて、新聞の社会面に並ぶ見出しをざっと流し読みした。

「そうだよねえ。あんたつてポーっとしてるから、そのトーストと布巾をすり替えたつて、気づかずに食べてそうだもんね」

姉貴は言つた。相手が怒り出すまでは、どんなにきつい言葉をぶつけても許されると思つているらしい。俺はよっぽど何か言い返してやろうかと思つた。

「それよりねえ、今日何時に仕事終わる？」

だけど、姉貴の方が先に話し始めてしまった。俺がお返しの悪態を思いつく前に、いつもこうやって姉貴がさっさと話題を変えてしまふのだ。

「帰りに得意先に寄つて……七時ぐらいには終わるけど」

俺は仕方なくそう答えた。

「だったら、帰りにスイカ買ってきてよ」

「スイカ？」

買ってくるのはいいんだけど、俺に頼むよりも、姉貴が自分で近所のスーパーに行った方が手っ取り早いような気がする。

「言っとくけど、まるごと一個じゃなきゃ嫌だからね」

姉貴は念を押すように言った。

「よく食うクワガタだな」

俺はそう言っつて、床の上にぺたんくと座り込んでいるツムグを見た。ツムグは、虫かごを目の高さを持ち上げてぐるぐると回していた。虫かごの中では、スイカの皮とクワガタたちが、波にさらわれたサ―フィンボードみたいに哀れにひっくり返っていた。

「あたしが食べるのよ。悪い？」

姉貴は言っつて、食卓の上にあっつきゆうりの漬け物に手を伸ばした。

「スイカは食いすぎたら、身体冷やすからやめとけ」

俺は言った。

「こんなに暑くちゃ、赤ん坊がお腹の中で茹だってるわよ」

姉貴はいつそう不機嫌な声になって、だらしなく食卓の上に突っ伏した。

「はいはい、わかりました」

俺はそれ以上、忠告してやるのをあきらめた。毎日、こんな姉貴のわがままにつきあわされている義兄の隆さんが、だんだん気の毒に思えてきた。

「それからね」

姉貴は顔だけを上げて、何か含みがありそうな感じでニヤついた。

「まだ何かあるの？」

俺はあきれて言った。

「駅前の果物屋のスイカじゃなきゃ食べないって、赤ん坊が言うてる」

姉貴はそう言っつて、チラシの裏の白い部分に、果物屋のある場所を簡単に描きとめた。

第2話：スイカを買いに

女の人が描く地図は正確じゃないことが多いけれど、特にうちの姉貴が描いたのはひどかった。まるで俺が果物屋にたどり着くのを阻止する目的で描かれたみたいだった。

駅前の商店街に立ってみると、地図に描かれた路地の数は、実際より三本も少なかった。地図の上では駅よりも大きく目立っていた煙草屋は、自動販売機でも十分用が足りるぐらいに控えめなスモールサイズだった。おかげで、俺がその果物屋にたどり着いたときには、もう夜の八時を過ぎてしまっていて、ちょうど店の親父さんが表に立ってシャッターに手をかけていたところだった。

「すみません。もう閉店ですか？」

俺は原チャリの座席にまたがったまま、慌てて親父さんに声をかけた。

「いやいや、まだシャッターは開いとるよ」

店の親父さんは言った。

「こんな半分眠つとるような商店街だからな。せつかく来てくれたお客さんの前で、ピシャツと閉める訳にはいかんわな」

親父さんの言うとおり、商店街は、駅前にあるとは思えないくらい暗く沈みこんでいた。灯りのついている店は数えるほどしかなく、水銀灯だけがぼつぼつと寂しそうに光っている。

「この時間には、どこの店も、閉まっちゃってるんですね」

俺は言った。

「昼間でも、シャッターの閉まつとる店は多いよ」

親父さんは口の端だけを軽く上げて、冷めた感じで笑った。

「まあ、中に入りなよ」

親父さんはそう言うと、店の奥へ引つ込んだ。俺は原チャリを店の前に止めて、親父さんの背中に従った。

店の中は、もう半分灯りが落とされていた。くすんだオレンジ色

の照明の下で、陳列台に乗った果物がぼんやりと影を落としている。その様子は、一日の仕事をようやく終えて、うとうと眠りかけているようにも見えた。

「スイカ、ありますか？」

俺は言つて、店の中をざっと見回した。店先には、巨峰の空き箱が、やりかけのジグソーパズルのように雑然と積み上げられていた。白桃や夏みかんが、三つずつきれいに揃ってざるに盛られている。まるごとのスイカは、どこにも見当たらなかった。

「スイカ、スイカかあ。スイカはなあ、今日の分は、全部売れちまつたんだよ」

親父さんは、やたら残念そうに『スイカ』を繰り返して言った。

「そうですね。じゃあ、仕方ないからまた、」

また来ます

俺がそう言つて帰ろうとしたら、親父さんは驚いたみたいに「若いのに、えらくあつさり諦めるんだな」と言った。

「家で食おうと思つて冷やしてるのが一つあるから、それを持って帰りゃいいよ」

下町の人つて、みんなこんなに親切なものなんだろうか。どうしてだか不思議になつてしまふくらい、気のいい親父さんだった。

「でも、そんなの申し訳ないですよ」

俺は帰ろうとしたけれど、親父さんはニヤニヤと笑つて首を振つた。

「いいから、家が上がつて行きな。ちよつと皮に傷がついただけで、どうせ店には出せねえんだ。贈答用のやつだから、びっくりするくらい甘めえぞ」

親父さんはそう言つと、俺の返事も待たずに、奥のガラス戸を開けてさつさと家の中へ引つ込んでしまった。

「あの、すみません。お邪魔、します」

一人取り残されてしまった俺は、仕方なくそう言つて、店の奥へ進んだ。ガラス戸のそばには、上がりかまちの板があつて、そこで

靴を脱げば、居間に入れるようになっていた。

「おう、今スイカ持つてくから、その辺に座つといてくれ」

居間の奥にある台所から、親父さんの声がした。

俺は居間の入り口に腰をかけて、親父さんが戻ってくるのを待った。居間の中は、俺が生まれる前からずっと変わっていないんじゃないかと思わせるような古びた佇まいで、それはなぜだか心地よかった。茶箆筥だとかちゃぶ台なんて、実物を見るのは初めてなのに、懐かしい感じさえする。

これから食事の支度をするところだったのだろうか、ちゃぶ台の上には、大人用の茶碗と箸の組み合わせが三つ並べられていた。台所からは、魚を甘辛く煮付けているようないい匂いが漂ってきた。

そういえば腹が減ったな

そんなことをぼんやりと思って、壁にかかった振り子時計を見上げると、もう八時半を過ぎていた。

「待たせてすまねえな」

親父さんが台所から顔を出した。親父さんが抱えていたスイカは、うちの姉貴の腹みたいで、まるまると張っていてかなり立派なものだった。

*

家へ帰ってから食べてみると、そのスイカはびっくりするぐらい甘かった。軽く塩を振る代わりに、間違えて砂糖の塊をぶちまけてしまったんじゃないかと思うぐらいだった。

「あのおじさんの店で買っと、同じ果物でも、他の店とは味がぜんぜん違うんだよね」

姉貴は言つて、もう三切れ目になるスイカに手をつけた。

「何て言うか、口の中で甘さが自然にスーッと溶ける感じなのよ」

よっぽど親父さんの店のスイカが食いたかったのか、姉貴は上機嫌で話し続けた。

姉貴が手にしたその一切れは、姉貴の胃袋よりも、明らかに大きいような気がした。俺は、ちょっと食いすぎじゃないかと心配になったけれど、黙って姉貴の好きなようにさせておいた。

「あそこのおじさん、けっこう人がいいでしょ」

姉貴は言つて、にやつと笑った。

「うん。確かに、やたらと気のいい人だった」

俺は答えた。

「娘さんもあんたとそう変わらない歳だけど、素直でいい子なのよ」
姉貴は言った。

「へえ。そうなんだ」

俺はそう答えて、頭の中に、親父さんの無骨な顔つきを思い浮かべた。あの親父さんに娘がいる。どんな顔をしているのか想像もつかなかった。俺はためしに、その顔から無精ひげを消してみても、代わりに長い髪をつけ足してみる。

想像の中で、無骨な親父さんにそっくりの娘さんがウインクなんてしてみせるから、俺はおかしくてたまらなかった。

「何をひとりで笑ってんのよ。気持ち悪いわね」

姉貴は言った。

第3話：破水

あくる日の早朝、俺は母親にたたき起こされた。姉貴がトイレに立ったときに破水したらしい。枕元の時計に目をやると、午前三時を少し過ぎたところだった。出産予定日はまだ二週間も先のはずだったから、母親は落ち着かない顔をしていた。

「病院にはもう電話したからね。私はお姉ちゃんと駐車場まで下りるから、あんたはツムグを抱いていつて欲しいんだよ」

それでも、母親の口調はてきぱきとしていた。

「わかった」

俺はそう答えて、手近にあったポロシャツとチノパンツに着替えた。

姉貴は、台所の床にしゃがみ込んでタオルケットに包まっている。「痛むのか？」

俺が聞くと、姉貴は小さくうなずいた。

「夜中に急にお腹が痛くなって目が覚めたの。まさか、まだ産まれる訳がないと思って、それからずっと横になってたんだけど、だんだん痛みが強くなってきて」

姉貴の目に涙が浮かんでいた。

「スイカ食いすぎて、腹を壊しただけなんじゃないの？」

俺は言った。姉貴があんまり不安そうな顔をしているから、何か気持ちの和らぐようなことを言っつてやりたかったのに、とっさには思いつかなかった。

「バカ！ ちゃんと……破水したわよ」

姉貴の声には、いつもの勢いがなかった。

「それより。ねえ、あんたからも隆くん電話してみてくれない？」

姉貴は珍しく、俺の前で甘えたような声を出した。姉貴夫婦は、うちのマンションから二駅ほど離れたところの公団住宅に入居している。この時間なら、義兄の隆さんは、まだ家で寝ているだろうと

思った。

「破水したとき、すぐに電話したのよ。でも、家の電話にも出ないし、携帯もつながらないの」

姉貴はタオルケットの端をぎゅっと握った。

「アイツつたら、大事なときにはいつも連絡つかないんだから」

姉貴はそう言って涙ぐんだ。

隆さんは、システムエンジニアの仕事をしている。得意先のコンピュータシステムに障害が起こると、夜中だろうが早朝だろうが関係なく、復旧に駆けつけなくちゃいけないんだそうだ。

「疲れて寝入ってるだけかもしれないよ。心配すんなって」

俺は言った。俺はポケットから自分の携帯を出して、隆さんの携帯に電話した。何度かコール音が鳴り、留守番電話のアナウンスが流れ始めたところで、唐突に、隆さんの声が割り込んできた。

「もしもし、和彦君？」

隆さんは少し疲れているような感じだったけれど、声ははっきりとしていた。どうやら、寝ているところを起こしてしまった訳ではなさそうだった。

「朝早くにすみません。さっき、姉が産気づいて。これから病院に向かうんです」

俺は手短かに用件を話した。

「そうか。参ったな……すぐにでも行ってやりたいんだけど、こっちもある意味で、生命がかかっている」

隆さんは深刻な口調で言った。

「生命？」

俺は聞き返した。

「得意先のネット通販のシステムがまったく使い物にならなくなつて、夜中に呼び出されたんだ」

隆さんは言った。

「このまま一日放っておくだけで、僕の生命保険でも弁償しきれないぐらいの損害が出るんだよ」

いつも落ち着いた物腰の隆さんには珍しく、いらだったような言い方をした。

「とにかくなるべく早く済ませてそちらに向かいます。和彦君とお義母さんには迷惑をかけてしまつて申し訳ない」

隆さんの言葉は丁寧だったけれど、口調はきつぱりとしていた。

「あの、少しだけでいいので、姉と話してやつてもらえませんか？ 普段あんなに気の強いのが、オロオロしちゃつてて」

俺は思い切つて言つてみる。

隆さんが常日頃、うちの姉みたいな口うるさい妻と、タイトな仕事の板ばさみに遭つていることを考えると、本当に申し訳なかつただけど、たつた五分の会話をするのにも、絶対に外しちやいけない大事なタイミングがあると俺は思った。ここ一番というときに、誰かが支えてくれる安心感は、やつぱりお金には代えられない。

「そうだね。少しなら……大丈夫だと思う」

「すみません」

俺は言つた。

「隆さんは、仕事がかかなり切羽詰つてて、身動きが取れないみたい」俺は言つて、姉貴に自分の携帯を差し出した。姉貴は怒つたような顔で、黙つて俺の携帯をひつたくつた。

「今にもお腹がぱっくり割れそうなくらいに痛いよ！ 原因の半分はあんたなのに、何で今度も来られないなんて言うのよ」

姉貴は、俺の携帯に向かつて怒鳴りつけた。

そういえば、ツムグが産まれたときも、隆さんは仕事があつて立ち会えなかつたんだつた。事情が許せば、隆さんだつてすぐに駆けつきたいだろう。こつやつて相手に食つてかかるのが姉貴なりの甘えだと分かつていても、隆さんがあまりに気の毒に思えた。

姉貴の声を聞きながら、俺は台所の隣にある和室へ向かつた。和室に敷かれた布団の中で、ツムグがぐつすりと眠り込んでいた。

俺はツムグをそつと抱き上げた。俺の腕の中で、ツムグはまだ気持ちよさそうに眠つている。起こして外出着に着替えさせるのが可

哀想になつて、パジャマのまま抱いていくことにした。真夏とはいえ、早朝はちよつと肌寒い。風邪を引かせないように、ツムグの背中にバスタオルをかけた。ツムグはほんの少し目を開けて、とろんとした目つきで俺を見上げる。タオルの肌触りが気に入らなかつたのか、ツムグは身体をよじつて少しくずつた。

「もうすぐ、ママのお腹から赤ちゃんが出てくるぞ」

俺は言った。ツムグの小さな手が、俺の着ているポロシャツをぎゅつとつかんだ。

*

それから六時間ほどで、姉貴は元気な女の子を産んだ。

俺は仕事があつて、出産までは立ち会えなかつた。だから、家で母親と夕飯を食いながら、詳しい話……というよりも、愚痴をたっぷりと聞かされた。

「仕事つてそんなに大層なもののかねえ」

母親は言つて、ため息をついた。

「だって、子どもが産まれたのが朝の九時半なんだよ。夕方になつてやっと病院に来るなんて、いくらなんでも遅すぎるじゃないの」「義兄の隆さんが、姉貴の出産よりも仕事を優先したことがよっぽど気に入らないらしかつた。

「仕方ないよ。もし隆さんが抜けたら、何千万円も損害が出るような仕事なんだつて。大変らしいよ」

俺は隆さんに聞いた話を、そのまま母親にして聞かせた。

「お母さんだつて大切な仕事を休んで、ずっとお姉ちゃんに付き添つただよ」

母親は、それでもまだ納得がいかないようだつた。母親は、スーパーの惣菜売り場で二十年近く勤めている。パートとは違って嘱託社員なので、あまり気軽には休ませてくれないらしい。

「コンピューター関係の仕事は、きつと、誰かが代わつてできるよ

うなもんじゃないんだよ。一個八十円かそこらのコロッケを揚げるのと、訳が違うんだからさ」

俺はそう言っつて、コロッケにかぶりついた。それは母親が病院から帰る途中に、どこかの肉屋で買ってきたものらしかった。

「私が揚げるコロッケは、衣がカリッとしてるって評判がいいんだよ。お母さんが仕事を休んだら、びっくりするぐらいに売れ行きが下がるんだから」

母親は不満げに言った。そう言われても、母親の揚げるいつものコロッケと、その辺の肉屋で買ってきたものとの違いが、俺にはよく分からなかった。

「和彦。あんたの仕事は、大事なときに休ませてもらえるの？」

母親は心配そうに聞いてきた。

「無理だよ。チラシは決められた日に折り込まなきゃ意味がないんだ。お得意さんとの契約を一回すっぱかしたら、二度と仕事がもらえなくなるよ」

俺が勤めているのは求人広告の会社だから、毎週日曜日の新聞に折り込むものと相場が決まっている。ちよつと都合が悪くなったからといって、掲載を月曜日に伸ばしてもらおう訳にはいかないのだ。

「そうかい。サラリーマンってのは不自由なもんだねえ。やっぱりあんたを婿にやった方が……」

母親は小さくため息をついた。

「え？ 婿つて……何の話？」

俺は聞き返した。

「あらつ、いや何でもないわよ。それよりあんたは確か、明日が休みだったね」

母親が慌てた様子で話題を変えた。そういえば、明日は日曜日だった。

「そうだけど」

俺は言っつて、ワカメの味噌汁をすすった。

「ちよつと病院に寄っつて、あれを届けてやってくれると助かるんだ

けど」

母親はそう言って、和室の方にちらりと目をやる。

電気を消した薄暗い部屋に、ツムグの持っていた虫かごが置かれていた。かごの中で、黒くて小さな影が二つ、ゴソゴソと動いている。そういえば、今朝は出がけにバタバタしていたせいで、クワガタのことをすっかり忘れていた。

第4話：虫が招いた小さな災難

その日は朝からひどい暑さだった。強い恨みを抱いた日差しが、俺をめがけて刺さってくるようだ。マンションの駐輪場にあった原チャリの座席は、まるで焼け焦げたみたいに熱かった。それでもめげずに原チャリにまたがって、向かい風を浴びていると、スーツと汗が引いていくのが分かった。クワガタの入った虫かごが、ハンドルに結びつけられて、ふわりと風になびいている。

姉貴のいる病院は、駅前の商店街を抜けたところにあつた。

シャッターの閉じた日曜の商店街は、スイカを買いに来たときと変わりなく、しんと静まり返っていた。その静けさを裂くように原チャリを走らせていると、少し先に、憶えのある人影が見える。その人はすぐに俺に気づいて、こちらへ向かって手を上げた。俺は慌ててブレーキをかけた。

「こんにちは」

俺は言った。

「おう、こないだの兄さんじゃねえか」

手を上げていたのは、果物屋の親父さんだった。

「親父さんのスイカ、すごく旨かったですよ」

俺は言った。原チャリのエンジンを止めると、とたんに汗が噴き出してきた。

「そうだろうな。プロの俺が選んだんだから、間違いねえよ」

親父さんは、そう言って目を細める。

「それはそうと兄さんよ。こんな朝早くから、どこへ行くんだい」

親父さんは俺に聞いた。

俺は朝飯も食わずに、八時半過ぎに家を出てきていた。

「ちよつと、この先の産婦人科まで」

姉貴が入っている病院では、朝の九時から面会を許されている。できれば本格的に暑くなる前に、さっさと用事を済ませてしまいた

かった。

「うちの姉が、二人目の子を産んで、入院してるんです」

俺は言った。

「おお、そうかい。もう産まれたのか」

親父さんは、少し驚いた風に言っつて、半開きになっているシャツに手をかけた。

「なら、ちよつと店に寄つてつてくれよ。あんたの姉さんに、何か栄養のつく果物でも見繕うからよ」

「あの、」

急ぎますから

俺が止めようとしたときには、もう、親父さんはシャツターの向こうへ姿を消してしまつていた。

「しょうがないな。行くしかないか」

俺はひとりつぶやいて、虫かごを肩にぶら下げた。原チャリは、そのまま店先に止めさせてもらうことにした。

シャツターをくぐつて店に入ると、熱く湿つた空気がべつたりと肌に張りついてきた。果物の並んでいない店先は、鮮やかさを失つてがらんとしていた。陳列台には、果物を盛るプラスチック製のざるがいくつか散らばつていただけで、ベニヤ板がむき出しになっている。俺は、クワガタを入れた虫かごをそこに置いて、額から流れる汗をTシャツのすそで拭つた。

「こんなに暑くちゃ、いくら汗かいたつて蒸発しちまうわな」

親父さんは、メロンを二つも抱えて現れた。

無造作に両脇に挟まれているけれど、どちらも贈答品のカタログで見かけるような網目の入つた立派なやつだ。

「そんな高い品物、いただく訳にいかないですよ」

俺は言つて、すぐに帰ろうとした。

「まあ、待ちな。本当の高級品は、あんたが決めるんだ」

親父さんはそう言つて、陳列台の上にメロンを置く。

よく見ると、親父さんの手には包丁が握られている。この場です

ぐに切り分けるのだろうか、俺は不思議に思った。

「この二つのうちで、どっちの玉が本物の高級品か、ぴったり当てたらそれも教えてやるよ。あんたの欲しい方を一玉やるから、好きなのを選んでみるよ」

親父さんはそう言ってニヤリと笑った。

「本当に、お気持ちだけで十分ですから」

万が一、高級品を言い当ててしまったりしたら、どうしたもんか困ってしまう。俺はあわてて踵を返そうとした。

「まあ、そんな水くさい遠慮なんてするんじゃないやねえよ」

親父さんは言って、俺の肩を抱きこんだ。

「あんたがその気になりや、いい品は、すぐに見分けられるようになるさ」

それは優しく言い聞かせるような口調だった。

続いて、俺の耳に飛び込んできたのは、思いもかけない台詞だった。

「あんた、うちの婿さんになる気はねえか？」

口調は優しくても、言っている内容はとんでもないものだ。

俺は自分の耳がおかしくなったのかと思って、しばらく親父さんの顔を眺めていた。

「あの。もう一度言ってもらっていいですか？」

俺は気を取り直して確かめる。

「うちの娘を、嫁にもらってくれって頼んでるんだ」

親父さんは真剣な顔をしていた。冗談を言って、俺をからかっている訳ではなさそうだ。

「ちょっと待ってくださいよ。娘さんと会ったこともないのに、どうしていきなり結婚なんて話になるんですか」

俺は慌てて聞き返した。

「そりゃあ、まあ……あれだ。この前、スイカを買いに来ただろ。あのときに、あんたを跡継ぎにつて、一目でピンとききたんだよ。あんた、いまどきの若いモンにしちゃあ、礼儀正しくて遠慮

深えしな。今日、あんたが店の前を通りかかったのも何かの縁だ」

親父さんはむちゃくちゃなことを言い出した。

「軽々しく結婚だなんて決められませんか」

俺は言った。

「そんな堅苦しく考えるなよ。まずは、ちらつと娘の顔だけ見てくれりゃいいんだ」

親父さんのいかつい顔が、ぐつと目の前に迫った。娘さんの話をしているのに、親父さんは、まるで自分のことのように顔を赤らめている。もし俺が娘さんと会うことを承諾したら、この親父さんとそっくり同じ顔をした、仁王が女装したみたいな人が、俺の前に現れるのだろうか。だからといって、顔を見たと勝手に縁談を断るなんて、そんな失礼なことをする訳にいなかった。

「ちよつとでいいから考えてみてくれよ。旨いメロンをたらふく食わせてやるからさ」

親父さんは包丁の先で、陳列台の上のメロンを指し示す。すつかり頭に血が上ってしまったのか、右手に包丁を握っているのを忘れていたみたいだ。目の前をひらひらと動く刃先のせいで、俺は身動きが取れなくなった。

そのとき、俺達の後ろから、若い女の子の声がした。

「お父ちゃん。私の使ってた包丁、どこかに持って行った？」

親父さんの娘さんだ。ここで引き合わされたら最後、もう断るチャンスはなくなってしまうだろう。何が何でも顔を合わせる訳にはいかない。

「おう、お客さんにメロン食わせてやろうと思ってな」

親父さんはそう答えて振り返る。その隙に、包丁の刃先が俺のそばを離れた。

「とにかく、お受けできません！」

俺はそう叫んで、果物屋の店先から全速力で逃げ出すと、夢中で原チャリを走らせた。

第5話：小さな虫が運んできた幸せ

「それで慌てて逃げてきたから、果物屋にクワガタを忘れてきちゃったんだ」

姉貴はシーツを握り締めて大声で笑った。俺は手ぶらで病院へ行く羽目になって、仕方なく姉貴にいきさつを説明したところだった。「あんまり笑わせないでよ。お産の後って、ちょっと力むだけでも痛いんだからね」

そう言っつて、しきりに目の端の涙を拭っている。昨日、二人目の女の子を出産したばかりだから、まだベッドで安静にしていなければいけないようだ。

「で、どうしてくれるの？ 弁償してくれる？ ツムグのオオクワガタ、一万円ぐらいするんだよ」

姉貴は面白がっているような調子で言った。

「え、そんなに高いんだ」

そんなものを弁償させられたら、俺は二ヶ月も小遣いなしで生活しなくちゃならない。

「でも、あんな逃げ方しちゃったから、もうあの果物屋には顔出せないよ」

俺は困って言った。

「そうね。包丁つきつけられて、娘さんとの結婚を迫られたんだもんね」

姉貴はおかしくてたまらないといった感じで、声を震わせて笑っている。

「別に脅された訳じゃないけど」

俺は言い足した。

「でも、あのおじさんが、そこまであんたを気に入ってくれるとは予想してなかったわ」

姉貴は言っつて、嬉しそうににんまりと笑う。

「予想？」

俺は聞き返した。

「そうそう。いつも病院で検診を受けるついでに、あの店に買い物に行ってたのよ。そしたら、この前、あの果物屋のおじさん、跡継ぎがいないんだってずいぶん嘆いてたから、『うちの弟がいるわよ』って、優しく励ましてあげたのよ」

すごくいいことをした、とでも言いたげに、姉貴は胸を張ってみせる。

「何だよ、それ」

俺は言った。

「じゃあ、俺にスイカを買いに行かせたのは……」

果物屋の婿にされかけたのは、もしかして、全部うちの姉貴が仕組んだことだったのか。そう言えばこの前、母親も『婿にやる』とかなんとか、意味の分からないことをつぶやいていた。みんなグルになって、こっそり俺に見合いをさせようと企んでいたのか。

「そうなのよ。釣書を渡す代わりに、本人にスイカを買いに行かせますって、おじさんに言っただけ」

まるで何でもないことのように、姉貴はさらっと言っただけ。

「その前に、相談ぐらいしたっていいだろう」

俺は本気で腹が立った。

「犬の交配じゃないんだから、俺の気持ちも考えろよ」

姉貴が気軽に吐いた言葉のおかげで、俺はこれまでもずいぶんと振り回されてきた。

「だけど、今回のことはいくらなんでもひどすぎる。このバカ姉貴のせいで、俺の一生まで左右されそうになったのだ。」

「いまさら、果物屋の親父さんに『あの話は、冗談でした』なんて謝って済ませられるほど、これは軽い問題じゃない。」

「そんなに怒らないでよ。あんたを見て、もし気に入ってもらえるようだったら、ちゃんとした席を設けて、あちらの娘さんと引き合わせるつもりだったの。あたしが早産になったせいで、すっかり予

定が狂っちゃって。だから、おじさんが焦ってフライングしちゃったのね」

姉貴はまったく悪びれる様子じゃなかった。

「フライングどころか、逆走しちゃって、かえってゴールから遠ざかってるよ」

あの親父さんがいきなり婿入りの話なんてするから、俺は、娘さんと会ってみようなんてまったく思えなかった。

そのとき、病室の外からドアを叩く音がした。

「誰だろう？」

俺は言った。

「あんた、ちょっと出てみてくれない？」

姉貴には、訪ねてくる人の心当たりがないようだ。

俺は病室のドアを開けた。

ドアの外に立っていたのは若い女の人だ。歳は二十代の前半ぐらいだろうか、控えめに笑みを浮かべて、俺の顔を見上げていた。

肩まですんなり伸びた黒髪と、薄いミントグリーンのワンピースが、白い肌を際立たせている。

まるで、夏の庭にひっそりと咲いている百合の花のような、清楚で可愛い人だった。

「あの、何か御用ですか？」

俺は聞いた。

「ツンちゃんのお母さん、こちらに入院されてますよね」

その人の声は、涼しい風が吹き込んできたみたいに優しくかった。

甥っ子のツムグを知っているということは、ツムグの友達のお母さんなのかもしれないと俺は思った。

「どうぞ、中に入ってください」

俺は、その女の人をベッドの側まで招き入れた。

姉貴はその人を見たとき、ぱっと明るい表情になる。

「あら、まなみちゃんの方から来てくれたのね」

姉貴は、急に声のトーンを上げて、よそいきの声色を使った。

「これがうちの弟なの。名前は、和彦」

姉貴は女の人に言った。俺は慌ててその人に会釈をした。

「それで、こちらがまなみちゃん。あのおじさんの……果物屋の娘さん」

姉貴は俺に向かって目配せをする。

「果物屋の……娘さん？」

俺は、姉貴の言うことがすぐには信じられなかった。

あの無骨な親父さんと、目の前の優しい女の人が、どう考えてもひとつの線に結びつかなかった。

「愛情の『愛』に、美術の『美』と書いて、まなみ、というんです。

お姉さんは、うちの店によく来てくださるんですよ」

愛美さんはにっこりと笑った。それはよく晴れた青空のような笑顔で、俺は思わず見とれてしまった。

「お見舞いがたら、忘れ物を届けに伺ったんです」

愛美さんの腕には、ビニールの風呂敷に包まれた高級そうなメモと、あの虫かごが提げられている。

「ねえ。こういう子、あんたの好みでしょ」

姉貴が俺の腕を引っ張って、耳元でささやいた。

俺はまんまと姉貴達の策にはめられて、見合いでするのも悪くはないか、なんて思い始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3676e/>

夏の贈り物

2010年10月8日15時51分発行